

山根純佳、平山亮著（勁草書房、2025年）

ケアする私の「しんどい」は、どこからくるのか 見えないケア責任を語る言葉を紡ぐために

海老名 祐実*

ケア実践の難しさ、ケア概念を定義する難しさ……こうしたケアを語ることの難しさに切り込み、ケアの〈「わからなさ＝不確実性（uncertainty）」と「できなさ＝実現不可能性（unfeasibility）」〉（200頁）そのもの、つまり「『何がケアになるかなんて誰にもわからない』ということ」（245頁）を中心テーマに据えたのが、本書である。

本書はケアをめぐる困難の可視化を試みたとともに、ケア責任に織り込まれた個人主義及びジェンダー不均衡の構造を指摘し、責任の分有・協働の在り方に迫る。本書は3部（全9章）構成となっており、第Ⅰ部では女性に多くゆだねられてきた「名もなきケア責任」について本書の分析視角を提示してケアを再考する。第Ⅱ部では、家族外の専門職や支援者との協働の可能性について、事例研究をもとに考察する。第Ⅲ部では、男性に焦点を当て、ケア責任の分有の在り方を検討する。

第1章では、ケア労働の議論にて、ごはんをつくるといった〈目に見える作業〉だけが取り上げられており、対して、〈目に見えない作業〉（例えば、ごはんをつくるときに、家族の状態や好み、どの時間に出すか、家にある食材や今後の予定との都合）という、相手のニーズを〈感知〉し、どんなケアをすべきかを〈思案〉し、情報処理を行うという活動（sentient activity：以下、SA）は、これまで十分に語られてこなかったと指摘する。

第2章では、保育サービスの利用を例に母親をめぐる規範とケア資源の欠如を指摘する。とりわけ、ケアの文脈におけるSAの実践の困難性が示されるとともに、育児や介護を多く担う女性がSAの活動を行い、かつケア資源の調達は彼女らの自己責任と捉えられている状況を明らかにする。

第3章では、原発事故による避難を検討する母親たちの事例をもとに、ケアにおけるリスク管理

の側面を検討する。とりわけ、生存に向けた自然資源・社会資源の調達と調整に着目し、SAが〈頭のなかで行われる作業〉にとどまらず、多くの他者とのやり取りを通じて行われる実践として、ケア実践を可視化する視角である、と概念を拡張する。

第4章では、SAの実行可能性は個人の能力のみに依拠せず、時間資源という物理的要件にも大きく左右されることを明らかにする。そのなかで、日本の男性は有償労働時間が変化しても家族へのケアに割く時間がほとんど増加しないことを示し、ケアが単に時間の有無によって担われているわけではないことを指摘する。それを踏まえ、男性には能力や時間の欠如を理由にしたケアの不関与が容認されているという、SAの実行可能性をめぐるジェンダー不均衡の構造を指摘する。

第5章では、家族外の専門職との協働の試みのプロセスとして、施設における認知症ケア（井口論文）、訪問介護におけるケア（齋藤論文）、養親のケア（野辺論文）、障害児ケア（藤原論文）という4つの事例におけるケアラーのSAについて論じる。

第6章では、第5章の事例をもとに、ケアの協働という観点からケア概念を再考する。複数の人がかかわることで、ニーズの再定義が生じるという相互作用性や、ケアをめぐる規範の多層性の気づき、ニーズを判別するための手がかりの発見に繋がると示す。しかし、専門職ではケアにおいてSAが不可欠であるにも関わらず、SAに該当する制度的評価が低く、報酬に結びついていないと指摘する。

第7章では、ケアに伴う〈迷い〉や〈わからなさ〉を女性の弱さに帰する規範を批判し、それらをケア責任の引き受けに内在するものとして捉える視点を提示する。さらに協働によるケアが負担軽減

* お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程

に資するとともに、多面的な検討や多様なケアの選択肢の提示、ケア責任の分有を可能にする点を示す。一方こうした協働が女性に限定され、ジェンダー不均衡が再生産される可能性を指摘する。

第8章では、男性性の視点からケア責任のジェンダー不均衡を問い、稼得責任や長時間労働といった構造的要因にケア不関与の理由を還元する構造を批判的に検討する。そのうえで、それらに帰責することで「やりたくてもできない」(196頁)男性像が形成され、男性の主体性をも制約される点を明らかにする。

第9章では、多くの男性が私的領域でケアを行わない点について、自立・自律的な個人像の前提があることを指摘する。ここで、男性とケアを分有するために、ケアにおける相互依存的な関係性(自律性が不存在であること)、ケアのわからなさ、寄る辺なさ、という脆弱性に向き合うという視点を示す。ケア責任の分有・協働への道筋として、個人主義的視点から転換し、社会のしくみ、すなわち、時間、場、信頼という社会関係に開いた(221頁)協働のためのつながりというSAの実践を促進させる資源の確保の必要性を示す。

本書の最大の特徴は、ケアの文脈の〈前提〉を問うたことである。それは、本書のケアの定義からも理解される。本書ではケアを「依存的な存在である他者に対し、よりよい状態を実現しようとする活動」(プロローグ: viii頁)と捉え、〈ニーズを満たすこと〉とはしない。ケアは、ニーズや様々な規範、資源の欠如という複雑な要因が重なったなかで行われるが、その過程ではニーズを満たそうと試みる〈けれど、わからない、できない〉という状況が蔓延っている。本書はこのケアの文脈を明らかにし、「『女性にだってどうしたらできるかなんてわからない』という事実をまずハイライトした上で」(252頁)、それにもかかわらず、女性に偏ってケア責任が集中する、というジェンダー不均衡を問うものである。従来のケア研究が十分に扱ってこなかった、うまくいかなさを引き受けて試行錯誤するプロセスそれ自体に着目し、ケア責任の平等な分配に向けた視角を提示した。この視

角は、SA概念を拡張し、多様な事例に基づく緻密な分析を積み重ねた著者らに特有のものである。なお紙面の都合で詳述できないが5章の各事例も示唆に富む。

関連して特筆すべきは男性性に関する記述である。第8章にて、男性同性間カップルが異性間カップルに比べて、家庭内のケア責任を分有し、協働関係を志向する傾向が繰り返し報告されている、にもかかわらず、「男性＝ケアしない・できない」(191頁)という理解が維持されている点を取り上げる。この理解は、同性カップルの男性たちを例外視する異性愛中心主義的なまなざしによって支えられていると分析する。このような実践の分析や可視化は、ケア責任において異性愛規範を前提とし標準とされてきた男性像や家族像を相対化するとともに、異性愛規範を前提として構築されてきた社会制度や規範の限界を示す一例である。

また、ケアの多くが家族によって担われ、〈ケアをしなければ家族としてそばにいられない〉という関係が事実上強制されている現状を指摘する(139頁)。本書は、この前提を問い、ケアが困難となっても親密性を維持しようとする協働のあり方の拡張を提起する(140頁)。これは、多様な関係性のあり方を可能とする共生に向けた社会のしくみの再編に示唆を与える点で有益である。

本書は、政策的検討への更なる展開可能性を示すとともに、時間や関係性に依存するケア、自立・自律的な個人像の再考、ネガティブ・ケイバビリティによる視点など、多角的な分析視角を提示している。これらは、法哲学や法社会学を含む諸領域にて、社会と法の接続のあり方を再考する手がかりを与える。そして日常の見方も変わるような、多くのヒントがちりばめられている。

本書は、ケアの非専門家でも軽快に読み進めることができる。ケアの不確実性に向き合う視座を提示しつつ、ケア責任の分有に向けたひとつの道筋を示す点に本書の意義がある。最後に、本書は、評者の自戒や内省を含めて、自立・自律の幻想にとりつかれた人間こそ、読むべきであろう。